

## 四年生から始めたサッカー

小野寺宏基

僕が小学校の三年生の時にJリーグが始まったような気がする。それを見て僕もサッカーをやってみたいと思った。それでサッカー少年団しょうねんだんに入って練習れんしゅうを始めた。練習のない日は、自分ひとりでボールを蹴けっていた。僕の目標もくひょうは、リフティング百回することだった。自慢じまんじゃないけど、僕は、運動神経うんどうしんけいは良いほうだ。毎日練習まいにちれんしゅうしたので、一ヶ月もしたらリフティング百回できるようになった。

そのころの僕は、今とちがってとても元気だった。授業中じゅぎょうちゅうは、時計とけいを見て早く休み時間にならないかなと思っていた。それは、友達あそと遊んだり、サッカーをしたかったからだ。もちろんサッカーだけでなく、バスケもいろんな競技きょうぎも得意とくいだった。だから、成績表せいせきひょうは人に見せられない。体育は「大変よい」。六年生までずっとそうだった。反対へんきょうに勉強べんきょうは「頑張がんばりましょう」が多かった。

小学校では、ちょっと好きな人もいた。周りの友達まわが「おまえ好きなんだろ。告白こくはくしろ」と言ったので、僕は軽い気持ちかる きもで話してみた。今では笑い話わら ばなしのようだ。

体の小さい僕が西野神社にしのじんじゃの相撲大会すもうたいかいで優勝ゆうしょうしたこともある。小学校の三年生ぐらいの時、今思い出してもとても嬉しい思い出だ。

六年生と中学校に入る間に倒たおれて病院びょういんに運はこばれた。何度も入退院を繰り返した。でも僕は、中学校でもサッカーを続けたかった。サッカー部の顧問こもんの先生が居なかった所以、僕は大好きな担任たんじんの先生こもんに顧問こもんになって欲しいほいとお願ねがいした。先生にはこどもがいたのでちょっと迷まよったようだったがけれど、最後は引き

受けてくれた。そのおかげでサッカー部ができた。もちろん僕もサッカー部に入った。が、ほとんど練習はできなかった。何度も入院した。学校で倒れてそのまま家に帰ることも多かった。サッカーができないことは、僕にとって本当に悔しいことだった。

僕の好きなサッカー選手は「カズ」だ。「カズ」のプレーはとても素晴らしい。僕は「カズ」のテレホンカードを持っている。そのカードは、もったいないので使わないで財布に残している。

僕がサッカーをしていた時のポジションは、左ウィングだった。シュートの時は左足で蹴る。僕のシュートで得点したこともある。でも僕のチームは弱かった。勝ったことはあまりない。だからたまに勝つととても嬉しかった。だから、仲間と練習したり試合するのが楽しい。

僕のいたサッカー少年団は、僕の二年下くらいからすごく強かった。でも二年下の人達は別のクラブに入った。そのわけは、学校のサッカー部の顧問の先生があと一年しか引き受けてくれないので別のクラブに入ったということらしい。

中学ではあまりサッカー部に参加できなかったけど、高校に入る時にはサッカー部がある高校を選んだ。家の近くにある西高（定時）にはサッカー部がなかったの、北高（定時）に入ることにした。北高のサッカー部の先輩には、とても上手な人達がいた。その中の一人は、昼はどこかのクラブでサッカーをしていて、夜は北高でサッカーをしていた。サッカーをする為に北高に入ったような人だと僕は思った。その人は運動神経が抜群だった。僕はこの先輩には敵わないと思った。でも、僕が病気でなかったら他の人には負けなかつたろう。なぜなら後輩に「キャプテンになってくれ」というようなことを言われるくら

いだったから。でも僕は病気だったので、キャプテンにはなれなかった。

高校でも病気で何度も倒れた。テスト中に倒れて担架で保健室に運ばれたこともある。そんな僕でも体育はいつもよい成績だった。最初に成績表を見たら「4」だったので思わず「なんで5じゃないんだ！」と心の中で思った。四年間の高校生活で体育はずっと4だった。でも最後は「5」だった。僕はそれを見て「当たり前だよ。」と思った。病気でなかったらずっと「5」のはずだったと思うから。

僕の病気の名前は、「でんかん」だ。もう十二年間の付き合いだ。でも全然良くならない。僕はこの病気を早く治したい。病気が治ったら、まず一人でゆっくりといろんな所に行ってみたい。それから漢字を勉強してコンピューターもおぼえたい。コンピューターを覚えたらどっかの会社に入って働きたい。そうしたら家をでて一人で暮らしたい。いつまでも親の世話には、なりたくない。自分で働いて生活できるようになったら、結婚もしたい。明るくて、楽しい家庭を作りたい。そこに子供もいる。妻もいる。それが今の僕の夢だ。